

20世紀初頭のアメリカにおける子どもの生活と Thomas D. Wood による学校衛生・体育論への着想

The Life of Children and Thomas D. Wood's Conception of School Hygiene
and Physical Education in the Early 20th Century United States

中 牟 田 佳 奈*

榊 原 浩 晃**

Kana NAKAMUTA *

Hiroaki SAKAKIBARA **

福岡教育大学大学院*

福岡教育大学保健体育講座**

(平成26年9月30日受理)

Abstract

The purposes of this study are to clarify the nature of Thomas Denison Wood's view of ideal family life in 1902 and to investigate how school hygiene was viewed in 1903 with reference to the underlying premises of Wood's *New Physical Education*. Wood presented an article titled "Some Controlling Ideals of the Family Life of the Future" at the Fourth Lake Placid Conference in 1902. In this article, he said that "the child should not be trained for mere personal attainment but for maturity, with reference to the power he will exert later, the influence which he will have in his own life and thru this on those who come after." This is a good summary of his views on the goals of the ideal education for the child's future life, family, and legacy for future generations. In the article, Wood also referred to the necessity of education for life and for the bringing up of children with an unselfish nature at home and at school. Wood's article "School Hygiene in Its Bearing on Child Life" was printed in the *Proceedings of The National Education Association* in 1903. Wood's views on these matters were published more comprehensively in *New Physical Education* (co-authored by R. F. Cassidy) in 1927. "New Physical Education" has been widely studied; initially, critics agreed that Wood's arguments on physical education were rooted in *Health and Education* by Wood, published in 1910, which over the next decade and a half developed into the proposals of the New Physical Education.

However, we located another paper by Wood on school hygiene (titled "School Hygiene") published in 1903, in which he asserted the importance of organic examinations as part of children's health care and school hygiene. According to Wood, the first step in education should be health care and the improvement of school hygiene, such as the control of infectious diseases in the school environment, and this should be managed responsibly at all educational stages. He further mentioned the necessity of regular health examinations, which he said should be conducted uniformly in schools within every community; he believed that such examinations would promote the prevention of infectious disease. Moreover, he asserted that complete examinations should include the examination of bones, internal organs, and tonsils; the assessment of eating habits; the evaluation of vitality, personality, or character abnormalities; and the examination of sensory abilities, such as vision and hearing. In the last part of this paper, Wood discusses the "true meaning" of health and the ideal approach to school hygiene. We believe the inclusion of physical and mental development in standardized public hygiene education, as laid out in this early article was central to Wood's *New Physical Education* as it was later conceived. Moreover, Wood insisted that educational thought, which he defined as the appropriate figure of education, was necessary to improve the physical and mental development of children. The material discussed in this paper shows that the importance of public hygiene and its meaningfulness for children's future lives was a fundamental tenet of *New Physical Education*.

キーワード : Thomas D. ウッド 子どもの生活 アメリカ 学校衛生 体育論

Key Words: Thomas D. Wood Life for Children United States School Hygiene Physical Education

1. 研究の目的

本研究は、1903年に刊行された標記の論説「子どもの生活と関連した学校衛生」¹⁾ (“School Hygiene in its Bearing on Child Life”) (以下、「子どもの生活と学校衛生 (1903年)」と省略する。)を手掛かりにして、Thomas Denison Wood (1865-1951)の学校衛生・体育論への着想について明らかにした研究である。このことはWoodの新体育論に関する思想的前提の検討につながる。「子どもの生活と学校衛生 (1903年)」²⁾は、これまで先行研究で指摘されている資料「学校衛生：現代教育における学校衛生の範囲 (1905年)」 (“School Hygiene: the Scope of School Hygiene in Modern Education” 以下、「学校衛生 (1905年)」と省略する。)より2年前に刊行されており、Woodの初期の体育論の萌芽を読み取ることでできる資料といえる。本稿ではこの資料の要点を明らかにしようとする。さらに、こうした資料吟味の経過のなかで、Woodは、1902年に「将来の家庭生活の理想の諸調整」³⁾ (“Some Controlling Ideals of Family Life of the Future” 以下、「家庭生活の理想 (1902年)」と省略する。)と題する論説をも発表していたことが判明した。1903年前後のこうしたWoodの論説では、学校衛生の領域の中に体育論を位置づけていた。これらの論点を吟味することは、Woodの新体育論に関する思想的前提を考察し、これまで言及されてきたWoodの思想形成過程をより精緻化することになる。本研究では、まず「家庭生活の理想 (1902年)」を検討し、次いで「子どもの生活と学校衛生 (1903年)」及び「学校衛生 (1905年)」の論説をWoodの体育論と関連づけて比較検討しようとする。

2. 先行研究の検討

これまでWoodの新体育論については、国内では小田切、新野、平井らによって、それぞれの論文や報告で1927年に刊行されるWoodとRosalind F. Cassidyとの共著*New Physical Education: A Program of Naturalized Activities for Education toward Citizenship*, 1927⁴⁾ (以下、『新体育』(1927年)と略する。)の内容とその刊行に至る経緯について跡づけられてきた。⁵⁾そこでの基本的な研究叙述とその内容は、Woodの*Health and Education* (以下、『健康と教育』(1910年)⁶⁾と略する)で具体化される体育論の構想が『新体育』(1927年)に継承され発展されたとしている点で一致している。なかでも、新野守氏は従来「体育における未解決の諸問題 (1893

年)」 (“Some Unsolved Problems in Physical Education” (1893年))の次に注目されたWoodの論文は1910年の『健康と教育』であるとしつつ、Woodが衛生・体育論の概要を「学校衛生 (1905)」において表明していたことを紹介している。⁷⁾Woodが著した「学校衛生 (1905年)」は、公衆衛生の一環として実施されてきた健康診断に教育的意味を付与し、体育を含む衛生を学校衛生と命名したと指摘している。⁸⁾一方、新体育論関連のテキストの文字情報から関連用語とその用語の使用頻度などを分析した小田切毅一氏の報告にも同様の記述がある。⁹⁾また、平井利雄氏によれば、WoodはWilliam H. Kilpatrickの1918年のプロジェクトメソッドを援用し、教育の基本は価値ある生活を実現することにより、教育は来世のための単なる準備としてではなく生活それ自体として考えられることが望ましいという。平井利雄氏は新体育のリーダーらがこのことを共通認識し体育とは生活であるというように戦後の日本の生活体育あるいは生涯体育の思想的発端が個々に確認できると述べている。¹⁰⁾この生活体育の考え方の出自を考えると、本稿で検討しようとする子どもと家庭生活及び学校衛生の接点は、まず、1902年の「家庭生活の理想 (1902)」にみられるであろう。このことを初めて検討しようとする。一方、アメリカでは、Ellen. W. GerberやMabel Leeの研究にみられるように、Woodの『健康と教育』 (“*Health and Education*” (1910))における体育論の構想が1927年の『新体育』に継承され発展されたことはもとより重視されている。¹¹⁾Gerberが指摘しているように、Woodの思想には哲学的深さがあるというものの、その実証性に乏しいのが研究の現状のようである。¹²⁾

3. Thomas Denison Woodの略歴

Thomas Denison Wood (1865-1951)はイリノイ州シカモア (Sycamore) に1865年8月2日に生まれた。¹³⁾ハイスクールまで当地で学び、オハイオ州のオーバーリン大学 (Oberlin College) に入学した。その後、1888年に文学士 (Artium Baccalaureus), 1891年に文学修士 (Artium Magister) を取得した。更に同年にコロンビア大学にて医学博士の学位を取得した。1891年から1901年にかけてスタンフォード大学にて衛生・生体訓練部局 (Department Hygiene and Organic Training) の教授を勤め、1901年から27年にかけては、コロンビア大学の教員養成学部 (Teachers College, Columbia University) に

において衛生・体育教授 (Professor of Hygiene and Physical Training) として教壇に立った。また配置転換の後、健康教育の教授 (Professor of Health Education) を 1927 年から 31 年まで勤めた他、32 年以降は名誉教授としてコロンビア大学に籍を置いた。1910 年の体育の国際委員会¹⁴⁾ (International Commission of Physical Education) や、1929 年の家庭・学校の国際連盟の健康部門¹⁵⁾ (Health Section of International Federation Home and School) に加入したり、1930 年に Herbert Hoover, President (アメリカ合衆国大統領) によって招集された児童健康保護についての「ホワイトハウス学童委員会 (White House Conference, Child Health and Protection)」の議長も務めた。¹⁶⁾ 1911 年から 38 年にかけて全米教育協会 (National Education Association) の議長¹⁷⁾ を担当し、その他にも、健康体育レクリエーション協会の会員 (Health Physical Education and Recreation)¹⁸⁾、アメリカ医学協会 (America Medical Association)、児童健康協会、米国科学振興協会 (America Association for the Advancement of Science) の准会員¹⁹⁾、ニューヨーク医学研究機関 (N. Y. Academy of Medicine) の学校衛生 (School Hygiene) 及び、健康教育 (Health Education) 担当者、『視覚救済評論誌 (Sight Saving Review)』編集委員²⁰⁾ 等を務めた。1951 年 3 月 19 日、マサチューセッツにて没した。²¹⁾

4. 「家庭生活の理想 (1902 年)」における子どもの生活と健康

1902 年の段階で Wood は将来的な家庭生活の理想として必要条件を提示した論説を発表している。この論説は 1902 年 9 月 16 日から 20 日までレイクプラシッドで開催された第 4 回レイクプラシッド家政学会議で発表されたものである。Wood は当該論説の目的について以下のように述べている。

「もし可能であるならば、現在の生活に直接的でなくとも影響を受けるかもしれない将来の子どもたちや次世代あるいはあらゆる世代の人々の生活全般に関わる重要事項のために、個々人や家庭における現在の利害関係を捨て去り、利己的ではなく、他人のことを思いやることは先見の明があり一層重視されていることである。こうした家庭の理想像に関するあり方のいくつかを指摘することがこの論説のねらいなのである。」²²⁾

Wood は将来の子どもたちや次世代の彼らにとっての家庭生活の重要性を主張した上で、そのための現状やこれからの家庭のあり方について言及している。そして、現在のみならず将来の世代の子どもたちにとっての家庭の理想像を示している。この将来的な存在を優先させる広汎な原理は、イギリスの社会進化論者である Benjamin Kidd²³⁾ による「能率計画の原理」(the principle of projected efficiency) を理論背景としたものであった。²⁴⁾ Wood は、人間関係における家族の重要性に触れており、家族が子どもの誕生や教育、早期の養育、社会的信頼の必要なあらゆる仕組みにとって重要な役割を果たしていることを指摘している。²⁵⁾

また、将来の目的のために生きることは全ての精神、家庭生活の細部、つまり家庭や仕事、気晴らしや喜び、人間関係における相互の興味などにまで影響するとしている。²⁶⁾ Wood は将来的な幸福のためには世俗的な利己主義は重要ではなく、「基本的な健康や能力、性格、向上心やより良い世界のための、他者への心のこもった思いやりこそ重要である」²⁷⁾ といい、個々の人々の利他的な意識のあり方について言及している。また、Wood は子どもの教育における親の役割についても「相対的な価値判断において、子どもは親よりも大切であるが、将来の世代は子どもよりもっと大切である」²⁸⁾ と述べている。こうして、子どもたちの十分な発育発達を妨げないような親の役割を提案した。Wood は「どれくらい頻繁に子どもたちが親の喜びや誇りのために大人に従うだけにさせられているのだろうか」²⁹⁾ と投げかけ、子どもが親の社会的地位や欲望に左右されていることについて問題を提起した。そして、「子どもは単に個人的な達成のために教育されるべきではなく、もっと彼らが後に得ることになるであろう能力への言及をもって、彼ら自身の生活において獲得したり、後々の経験を通しての影響等の成長のために教育されるべきなのである」³⁰⁾ と述べ、子どもたちの将来的な自己実現や十分な発育発達のための家庭生活や学校における計画的な教育の必要性を訴えていたのである。そして Henderson の「教育は日々常に考慮されるべきである」という言葉を引用し、教育において注目されていないが、発達させるべき事項やその内容についても言及している。

「提案したこととしては、単純に子どもたちは自身の文化、労働収益を得る能力、社会生活の共有

のためだけでなく、より幅広い目的のために教育されるべきである。恐らく、この幅広い考え方は、私たちの最も近代的な教育方法のどのような顕著なやり方においても変わることはないだろうが、それは、まだ十分に注視されていない確かな段階のために、より明解な動機づけ、刺激、認識を与えるだろう。その内容には、より生活や生物界を取り扱うべきである。つまり、自然界における人間の居場所、より多くの人間生活に関する研究、そしてその性質、起源、発達について取り扱うべきである。」³¹⁾

そして上記に加えて、Wood はそれらの将来的な次世代のための教育の提案は現代の子どもたちにも望ましい影響を及ぼすとし、日々の生活の中で見落とされがちな感動や、様々な経験による精神の高揚をもたらす教育的な重要性を示している。そしてこのような教育は適切で潜在意識的かつ自動的であり、しかしながら常に思慮分別を持って管理運営されているものとした上で、家庭にも望ましい影響を与えるものとなるだろうというのである。

「そのような教育の段階の水準は、私が簡潔に述べてきたことではあるが、もちろん生き生きとした人生において、家庭における理想に影響を与えるだろう。この将来への意識的な責任感、将来にもたらされる世代に対するものと全く同じくらい現在生きている子どもたちをも支援するのであろう。現在にとっては实际的であっても、同時に将来を見据えた無限ではあるが明確な主旨が確保されている理想の追求によって、人は唯一最も高度な自己実現を達成することが出来るのだ。私たちが、バランス感覚や遠近感がなくなってしまう終末に備えて努める際に、まともな判断では、要するに我々は我々自身を、そして他の誰かのために働きかけるという大きな機会を失っているということである。そこには、将来の次世代の権利のために、義務的要素を無視せずに、日々働くという中で、それらの経験を通してしか味わえない感動や、直接の精神的高揚が存在するのである。こうした潜在意識的かつ無意識的な（しかし常に管理され分別を持った）多くの方法の中で、最初は新しく、意識的で、後々に適切な教育や方法を通していく考え方は、個々人や家族を管理する信念の原動力となるであろう。」³²⁾

このように Wood は将来的な世代や子どもたちの教育にとって重視されるべきことは、日常生活における経験によって得られるものや、限られた時間の中で対人への思いやりの心を抱いて生きることによって得られるものであると主張し、より生活に即した教育や、利他的な行為を促す家庭生活における教育の提案を行ったのである。それは、それまで注目されていなかった、感動や精神的高揚と表現される、より豊かな人間性や精神を形成していく教育への着目であった。そのために家庭は人間社会や文明の前進のためや家庭の存続のために不可欠な資質を伝えたり、発展させたりする場としてみなされるべきであるとし、その要素である住居、食事、衣類、個人の身体的健康（personal health）等の多くの事柄によって判断されるものと述べている。³³⁾

また、Wood は自然界における人間の病弱さについても問題を指摘した上で、より個人的な生活や健康の充実のために家庭科教育の内容について提案した。

「家庭科は個人の衛生、身体、そして生きていくための活力を身につけるための学習をより強調するべきである。これはさらに、生活や個人的活動における考え方や習慣をもって行われなければならない適切な食生活や完璧な家事などによる立派な家庭環境における、身体の衛生に影響を及ぼすことについてや、自身の周囲環境を最大限に活用することが出来る生き方や個性を発達させることを意味している。」³⁴⁾

このように、Wood は人間の価値ある目標のための不可欠な要素の1つである健康（Health）が常にないがしろにされていることを指摘している。³⁶⁾そして、人間が文明の中で健康や身体の丈夫さを保持することを学んでいなかったことを述べ、家庭科教育における個人の衛生や身体、生命力の増大についての学習の重要性を指摘している。更に、このことが衛生や食生活、清潔な家庭環境など身体に何らかの影響を及ぼすことや、人間の生き方や生活、個人的活動における習慣、周囲環境に順応する性格の発達などに関連して行われなければならないとも述べている。そして健康が家庭や学校の基本方針であるとし、学校は家庭での子どもの生活に気を配り、家庭と学校は連携して活動を行う必要があるとしている。³⁷⁾

Wood はこのような考え方は理論的で不明確に思われるであろうが今日の生活全体と関係しそれ

らの考えを通して、生活に対する意識の中で成功をおさめたり、幸せを感じる個人や家族が存在することを示している。このように「家庭生活の理想（1902 年）」をめぐるのは 1903 年の論説に継承される論点が存在する。³⁸⁾

1902 年の「家庭生活の理想（1902 年）」において、将来の世代への影響を考えた利他主義（altruism）の考え方を持った生き方や、そのための教育のあり方を提唱していた。特に、Wood は教育の中で子どもたちに意識させ健康の充実を図ることで、子どもたちの成長や自己実現、人間形成の充実を図る必要があると考えていた。

5. 1903 年時点での T.D. ウッドの体育論の構想 —「学校衛生（1905 年）」との比較—

(1) 「子どもの生活と学校衛生（1903 年）」にみる体育論の位置

1903 年の論説「子どもの生活と学校衛生（1903）」（“School hygiene in its bearing on child life”（1903））は、1903 年 7 月 6 日から 10 日までボストンで開催されていた全米教育協会（National Education Association）の第 42 回年次総会で発表されたものである。1903 年論説と 1905 年論説の内容の概略とコンテクストを把握して作成を試みたのが Table 1.（Table 1. 「子どもの生活と学校衛生（1903 年）」及び「学校衛生（1905 年）」の内容とコンテクストの比較）である。1903 年論説の段落ごとの骨子は Table 1. のとおりであるが、Wood は、「学校衛生の教育への位置づけ」、「子どもの生活と環境」及び「学校衛生と体育」の 3 つの観点を繰り返し主張していた。³⁹⁾

① 学校衛生の教育への位置づけ

Wood は現実の教育の中において、学校衛生の教育が生活や社会全体の幸福にとって重要事項であることが認識されていないという。また、人間生活において環境に順応することや責任感、社会性などの人間性を養う子どもたちへの教育が、必要であるという。⁴⁰⁾

さらに、身体や健康のために必要とする多くの対策は家庭において具体化されていることから、公教育を通して家庭を教育し、注意喚起していくことが公教育の機能であり義務であると言及している。⁴¹⁾

② 子どもの生活と環境

そして Wood が学校衛生の不可欠な要素として重視したのは子どもの生物学的検査（biological examination）⁴²⁾ であった。これに関して Wood は George Gould 教授の研究内容を挙げ、その中

の“定期的な生物学的検査”（periodic biological examination）に着目している。その生物学的検査は (1) 遺伝的なデータ（The hereditary datum）、(2) 発達発育や生育史の記録（The development and historic record）、(3) 基礎としての形態論的構造や人体測定検査（The morphologic or anthropometric examination is fundamental）、(4) 生理学的な記録（The physiologic record）、(5) 精神的・知的データ（The psychic or intellectual datum）、(6) 病理学の要素（The pathologic element）、(7) 遺伝的な要素（The factor of heredity）を含んでいた。⁴³⁾ また、1903 年の論説にはそれらの実現のための学校医（school physician）の必要性を説き、その現状についても言及している。学校での教育と結びついた徹底的な健康管理とそれに対する全面的な協力の必要性が望まれるからであるとして、⁴⁴⁾ 家庭や学校における指導はそのような生物学的検査を通してそれぞれの子どもたちの身体状態を把握するからこそ成り立ち、子どもたちの成長や発達、そして何らかの異常に対して十分に対処することができるかと主張している。⁴⁵⁾

Wood は、学校衛生の特色は、教育全体の基礎であるべきだと提唱している。子どもたちの現状の把握、一人一人の特性（characteristics）や個性や才能に気付き、それぞれに丁寧に対応することの必要性を訴え、そのための手段として生物学的検査を重視した。そしてこの検査の内容による詳細の把握を家庭と連携して行うことで家庭と学校による協力を生み、子どもたちへの教育の充実を実現できると考えていたのである。⁴⁶⁾

また、学校全体の環境や子どもの適応能力、健康への影響を検査したうえで学校衛生は対策を講じられるべきであると述べている。⁴⁷⁾

③ 学校衛生と体育

ここでは教育の基礎として学校衛生をカリキュラムの一端に位置付ける必要があるという Wood の考え方が現れている。⁴⁸⁾ 校舎や校庭などの設備環境が子どもたちの身体的成長や健康に良くも悪くも影響することが指摘されており、Wood は光や空気、動きの自由といった環境や空間の設備改善の必要性を訴えている。⁴⁹⁾ さらに Wood は教育を通じた学校衛生の機能として体育を挙げている。⁵⁰⁾

「この体育の計画では、授業と授業の間や、休憩時間の自由な遊び時間に用いられる一層形式的な体操や遊戯と、強制的であり単純なリラクゼーションの運動を 1 つにまとめられたり相互に関連

Table 1. 「子どもの生活と関連した学校衛生（1903年）」および「学校衛生（1905年）」の内容とコンテキストの比較

「子どもの生活と関連した学校衛生」(1903年)		「学校衛生—現代教育における学校衛生の範囲—」(1905年)	
"School Hygiene in Its Bearing on Child-Life" (1903), pp.778-785.		"School Hygiene The Scope of School Hygiene in Modern Education" (1905), pp.226-229.	
【1】現在の学校衛生・医学的検査	【1】現在の学校衛生・医学的検査	【1】現在の学校衛生・医学的検査	【1】現在の学校衛生・医学的検査
【2】生活や人間社会全体の幸福のために必要な学校衛生・医学的検査	【2】生活や人間社会全体の幸福のために必要な学校衛生・医学的検査	【2】学校衛生の教育における認識、課題	【2】学校衛生の教育における認識、課題
【3】学校衛生の教育における認識、課題	【3】学校衛生の教育における認識、課題	【3】様々な環境での成功を実現するための教育の必要性	【3】様々な環境での成功を実現するための教育の必要性
【4】様々な環境での成功を実現するための教育の必要性	【4】様々な環境での成功を実現するための教育の必要性	【4】公教育の機能や義務	【4】公教育の機能や義務
【5】公教育の機能や義務	【5】公教育の機能や義務	【5】学校衛生の教育における役割と責任	【5】学校衛生の教育における役割と責任
【6】学校衛生の教育における役割と責任	【6】学校衛生の教育における役割と責任	【6】生物学的検査、George Gould教授(身体、人体測定、医学的検査)、検査の目的と検査官のあり方	【6】生物学的検査、George Gould教授(身体、人体測定、医学的検査)、検査の目的と検査官のあり方
【7】生物学的検査、George Gould教授(身体、人体測定、医学的検査)	【7】生物学的検査、George Gould教授(身体、人体測定、医学的検査)	【7】医学的検査の方法と時期	【7】医学的検査の方法と時期
【8】学校医の必要性	【8】学校医の必要性	【8】医学的検査への言及	【8】医学的検査への言及
【9】知的な養育とその教育の重要性、個々の保護や調整と学校における指導	【9】知的な養育とその教育の重要性、個々の保護や調整と学校における指導	【9】Cronin博士、健康部門の管理における様々な考慮すべき点	【9】Cronin博士、健康部門の管理における様々な考慮すべき点
【10】Hertel博士、コペンハーゲン	【10】Hertel博士、コペンハーゲン	(1) 学校での子ども達の外衣についての適切なケア	(1) 学校での子ども達の外衣についての適切なケア
【11】アメリカでの調査結果	【11】アメリカでの調査結果	(2) 教室の適切な換気	(2) 教室の適切な換気
【12】子どもに関する医学的検査情報	【12】子どもに関する医学的検査情報	(3) 教室の適切な照明	(3) 教室の適切な照明
【13】家庭への情報提供と学校と家庭の協力	【13】家庭への情報提供と学校と家庭の協力	(4) それぞれの子ども達のための広い収容能力	(4) それぞれの子ども達のための広い収容能力
【14】学校衛生の役割と特色	【14】学校衛生の役割と特色	(5) 充分な運動場の場所	(5) 充分な運動場の場所
【15】子どもの学校環境の中での重点項目、学校の様々な場面での学校衛生	【15】子どもの学校環境の中での重点項目、学校の様々な場面での学校衛生	(6) 公立学校における浴室の設置	(6) 公立学校における浴室の設置
【16】健康は全てではなく全体の基礎であり、教育の第1であることの言及	【16】健康は全てではなく全体の基礎であり、教育の第1であることの言及	(7) 教育委員会による学習の賢明で誠実で実行可能なカリキュラムの採用	(7) 教育委員会による学習の賢明で誠実で実行可能なカリキュラムの採用
【17】上に同じ	【17】上に同じ	子ども達の歯や口頭の虫歯の検査や強制的な保護、異常や屈折の除去や矯正	子ども達の歯や口頭の虫歯の検査や強制的な保護、異常や屈折の除去や矯正
【18】James E Russell(ニューヨーク)の指摘	【18】James E Russell(ニューヨーク)の指摘	(8) 運動器官の変形の矯正	(8) 運動器官の変形の矯正
【19】校舎による影響、都市化の課題(光り、空気)	【19】校舎による影響、都市化の課題(光り、空気)	(9) 授業出席による全ての精神病の排除	(9) 授業出席による全ての精神病の排除
【20】体育の計画、生物学的検査と体育の位置	【20】体育の計画、生物学的検査と体育の位置	(10) 全ての肥太性扁桃腺やその他のアデノイド異常成長の除去	(10) 全ての肥太性扁桃腺やその他のアデノイド異常成長の除去
【21】子どもの教育と学校衛生、健康教育、Mitchell Prudden博士(生活における衛生教育)	【21】子どもの教育と学校衛生、健康教育、Mitchell Prudden博士(生活における衛生教育)	(11) 知力的に劣る子どもの分離	(11) 知力的に劣る子どもの分離
【22】私的な衛生教育	【22】私的な衛生教育	(12) 家庭環境の改善(家屋や衛生面)	(12) 家庭環境の改善(家屋や衛生面)
【23】健康教育と指導者の管理	【23】健康教育と指導者の管理	【10】これからの学校衛生・教育の改善への期待	【10】これからの学校衛生・教育の改善への期待
【24】結論 1. 人間の目標達成に不可欠な健康、教育の一般的な考え方	【24】結論 1. 人間の目標達成に不可欠な健康、教育の一般的な考え方	【11】学校衛生改善による教育の改善	【11】学校衛生改善による教育の改善
		【12】より全体的な検査への提案、知的な養育とその教育の重要性	【12】より全体的な検査への提案、知的な養育とその教育の重要性
		【13】個々の保護や調整と学校における指導	【13】個々の保護や調整と学校における指導
		【14】Hertel博士、コペンハーゲン	【14】Hertel博士、コペンハーゲン
		【15】Francis Warner博士、ロンドンにおける調査	【15】Francis Warner博士、ロンドンにおける調査
		【16】Risely博士、フィラデルフィア調査	【16】Risely博士、フィラデルフィア調査
		【17】Sexton博士、ニューヨーク調査	【17】Sexton博士、ニューヨーク調査

【25】	2. 学校衛生と体育の領域の融合	【18】	ドイツ、サクセンマイニンゲン、1900年調査
【26】	3. 学校衛生と教師らの役割、ヨーロッパ・ドイツ・アメリカの健康教育	【19】	アメリカでの調査結果
【ディスカッション】 pp.784-785.		"School Hygiene: The Scope of School Hygiene in Modern Education" (1905), pp.259-263.	
【1】	コロラド州デンバー、エルムウッド校, Homer W Zirkle (医学的検査の実態)	【20】	子どもに関する医学的検査情報
【2】	生理学と身体機能の関係、精神にとっての体育	【21】	バーモント州議会において採択された公立学校における子どもたちへのケアとその指導者のあり方
【3】	教育と心身の成長の関係性と医学的検査、学校医の価値	【22】	家庭への情報提供と学校と家庭の協力
【4】	学校における医学的検査	【23】	検査で得られた情報の管理について
【5】	伝染病の治療と予防のための医学的検査	【24】	学校衛生の役割と特色
【6】	教育や医療のためのコストの現状と改善	【25】	子どもの学校環境の中での重点項目、教室等の学校計画の不足
【7】	医学的検査や衛生管理についての国の責任	【26】	環境の検査、管理
		【27】	学校の様々な場面での学校衛生
		【28】	健康は全てではなく全体の基礎であり、教育の第1であることの言及
		【29】	James E Russell (ニューヨーク) の指摘(校舎による影響、都市化の課題(光り、空気))
		【30】	保護、学校衛生の理想
		【31】	体育の計画、生物学的検査と体育の位置
		【32】	子どもの教育と学校衛生、健康教育、Mitchell Prudden 博士(生活における衛生教育)、私的な衛生教育
		【33】	衛生の指導への試み
		【34】	衛生教育の価値・あり方
		【35】	学校衛生 (自然研究) と生活への言及
		【36】	健康教育と指導者の管理
		【37】	結論、まとめにかえて
		【38】	結論 1. 人間の目標達成に不可欠な健康、教育の一般的な考え方
		【39】	2. 学校衛生と体育の領域の融合
		【40】	3. 学校衛生と教師らの役割、ヨーロッパ・ドイツ・アメリカの健康教育

出典

- Thomas D. Wood, "School Hygiene in Its Bearing on Child Life", *The Proceedings of the National Education Association* ", 1903, pp.778-784.
- Thomas D. Wood, "School Hygiene: the Scope of School Hygiene in Modern Education", *Mind and Body*, 1905, Vol. 12, No.140 & 141, pp.226-229 and pp.259-263.

※ゴシック字体の部分は1903年と1905年の双方の論説に共通する内容を示している。黒塗りの部分は体育に関して述べられている段落を示している。

したりしなくてはならない。正規の学校の授業の残り時間で、実行可能な限り体操を関連付ける必要がある。そしていかなる場合でも、それらを一層合理的で実際の、活用しやすくすることが望まれる。ここでは身体訓練の技能的な活動の詳細を議論しようとしているのではなく、これが学校衛生の広範囲な領域に含まれているということを単に述べようとしているのである。既に述べた生物学的検査は子どもたちの幅広い体育の方向性や運動の適用をめぐって基礎的なこととして最も必要で価値ある情報を提供するものであろう。」⁵¹⁾

Wood は学校衛生の一領域に体育を位置づけ、その中で身体的な欠陥の矯正や、学校活動の関心と運動を結び付け、子どもたちにとって合理的で実用的な運動を構成し実践していくことが重要であると主張している。そして、その運動や指導の基礎となる情報は生物学的検査によって得ることが可能であるとした。⁵²⁾

さらに、Wood はそのような教育は特別な指導者の管理の下で行われるべきであり、そのような管理のもとであるからこそ衛生に関する効果的指導が実現可能であるという。ここで Wood は教育の一環として学校衛生が加えられることや健康や衛生に関する教育が、訓練された指導者によって責任を持って行われることを提案し、教育の改善と健康教育の方法について言及している。⁵³⁾ 体育の教員や管理者たちの関心が健康へ向けられ、体育と学校衛生との融合を構想していた。⁵⁴⁾

「教育のこうした健康的側面の異なる位相は、運営と管理のために学部の一局部の努力の下で学校衛生と体育の領域を統合することによって一層円滑に成し遂げられるであろう。身体訓練 (Physical Training) の教師や指導者の立場は既に多くの学校で認可され準備されている。特別な教師の努力は第一に健康の関心に捧げられなければならない。この領域は体育と学校衛生と呼ばれ効果的に拡大されるであろう。」⁵⁵⁾

そして、「子どもの生活と学校衛生 (1903 年)」の小括として、Wood は、1. 人間の目標達成に健康は不可欠であるとして、学校における衛生の教育を学校衛生として位置づけていた。2. 学校衛生は体育の領域を融合させる構想を提示していた。3. そのために学校衛生を担う教師らの役割について言及していたのである。

④「ディスカッション」(将来への展望)

「子どもの生活と学校衛生 (1903 年)」にみるディスカッション⁵⁶⁾ は、将来への展望として列挙されていることである。それらは、以下のような内容であった。Wood はコロラド州デンバーにあるエルムウッド学校の校長である Homer W. Zirkle 氏の医学的検査がドイツやフランス、アメリカの多くの都市で行われていると指摘し、それらが多くの身体的欠陥や病気の発見を促し、単に伝染病の改善だけではなく、より広い有効性を持っていることを指摘している。⁵⁷⁾

さらに、精神と身体の相互依存の關係に着目し、アメリカやイギリスの人体測定や計測によって、精神的発達は通常の身体的発達に依存していることが顕著に示され、その違いの原因としては周囲環境が挙げられることが判明したという。⁵⁸⁾

そのことから Wood は学校医には環境改善のために子どもたちの身体的機能の弱さの原因を追究し治療法や改善策を提案する義務があることや医療調査官には子どもたちの精神的努力と年齢の關係や身体的欠陥と精神の關係について判断することや、子どもたちの身体能力の把握や十分な活動場所の確保、彼らの怪我への治療・対策、身体的発達の遅れのある子どもへの教育などの面で教師らを支援するべきであることを述べている。また、それらの養育について正しい方法の理解を訴えており、間違った方法による病気や欠陥の発生を懸念している。そして、再度学校システムにおける基礎として医学検査を実施することを提唱し、その検査が病気の発見や治療以前に予防するための活動として認識されるべきであるとしている。こうした活動が充実していくことによって運動 (exercise) と教育 (education) を関連付けて身体を成長させることを展望している。⁵⁹⁾

(2)「学校衛生：現代教育における学校衛生の範囲」(1905 年)

1905 年論説「学校衛生」は基本的には 1903 年の内容を踏襲しているが、1905 年論説に付け加えられていることとして、まず Wood は医学的検査が単に健康を改善することのみが目的ではないということ、そしてそれを実践する検査官は専門的な医学的知識の他に教師と同じように的確な教育的訓練の基礎を持っている必要があることを訴えている。⁶⁰⁾ さらに医学的検査の具体的な方法や時期についても言及しており、その医学的検査が健康管理システムの一部として管理され、定期的に特別な医師や検査官によって行われること

が必要であると考え、そうした検査の学校や地域にとっての重要性を指摘している。⁶¹⁾ Wood はさらに、学校看護師 (school nurses) の必要性や子どもたちの病気の治療についての医師らへの教育、そして家庭で与えられるべき養育や親への教育支援などそれまで軽視されてきた細部についても指摘を加えている。⁶²⁾

また、Cronin 博士の医学的検査以外の分野における考慮の必要性についても触れており、その指摘には身体的・精神的疾患や知的・身体的欠陥への配慮の他に、施設設備や収納、換気や照明、服装、そして家庭での衛生管理といった子どもたちの関わる周囲の環境面への配慮などが挙げられている。⁶³⁾

Wood はこのことから、これまで見落とされてきている病気や欠陥の早期発見のために、より全体的な生物学的検査の早急な実施を主張していた。⁶⁴⁾ Wood は上記で述べてきた教育や環境の管理、検査、そして家庭や地域との協力といった総合的な学校衛生の重要性を重ねて訴えていた。⁶⁵⁾

そして、それが学校生活の隅々まで行き届き、初等教育の低学年から高等教育にかけての学校教育の中で実現していくこと、またその学校教育が生活の問題に関連付けられ、健康や生活の改善がどこでも学校での活動を通して行われるべきであるとしている。⁶⁶⁾

6. まとめにかえて

「家庭生活の理想 (1902 年)」においては、Wood は将来を見据えた生活や教育の価値について言及していた。その実現のために重要となる、家族の役割や家庭における教育や養育、環境の整備の必要性を論じていた。そして、「子どもの生活と学校衛生 (1903 年)」では、学校衛生の領域と内容が、子どもたちの成長や自己実現において重要な要素の 1 つであると重ねて主張していた。学校が家庭と協力していくことは、身体的な発達や個人の能力を最大限発揮することにつながるという。そのために生物学的検査の必要性を訴え、そこで得られた情報をもとにして、子どもたちの病気や欠陥に対する学校や家庭、地域、そして国が連携し、様々な視点からの対策を充実させていくこと、そしてその改善と予防のための学校衛生の確立を訴えていた。そして、学校衛生の領域と内容の一端に体育が位置づけられていた。まさに学校衛生・体育論の着想がみられる「家庭生活の理想 (1902 年)」と「子どもの生活と学校衛生 (1903 年)」の論説は、1910 年の『健康と教育』にみる

体育論の思想的前提と捉えられ、その後の新体育論の思想形成過程にも継承されているのである。

【引用・参考文献】

- 1) Thomas D. Wood, "School Hygiene in Its Bearing on Child Life", *Proceedings of the National Education Association*, 1903, pp.778-784.
- 2) Thomas D. Wood, "School Hygiene: the Scope of School Hygiene in Modern Education", *Mind and Body*, 1905, Vol. 12, No.140 & No.141, pp.226-229. 及び, pp.259-263.
- 3) Thomas D. Wood, "Some Controlling Ideals of Family Life of the Future", *The Proceedings of The Fourth Lake Placid Conference on Home Economics*, 1902, pp.25-31.
- 4) Thomas D. Wood and R. F. Cassidy, *New Physical Education: A Program of Naturalized Activities for Education toward Citizenship*, New York, 1927
- 5) 小田切毅一, 「ウッド／キャシディー『新体育』」, 松田岩男・成田十次郎編, 『身体と心の教育』, 講談社, 1981 年, pp.156-171, 新野 守, 「T. D. ウッドの『新体育論』の成立過程に関する研究」, 修士論文, 筑波大学, 1987 年, 新野 守・三浦幹夫, 「T. D. ウッドの初期の体育論に関する研究—1891 年から 1910 年前を中心に—」, 『教育研究所紀要』, 23 号, 滋賀大学, 1989 年, pp.47-53., 平井利雄, 「新体育形成期の論点に関する一考察」, 『体操とスポーツと教育と』, 大空社, 1989 年, pp.210-218.
- 6) Thomas D. Wood, "Health and Education", *The Ninth Yearbook of the National Society for the Study of Education*, The University of Chicago Press, 1910, pp.75-104.
- 7) 前掲書, 新野 守・三浦幹夫, 「T. D. ウッドの初期の体育論に関する研究—1891 年から 1910 年前を中心に—」, p.50.
- 8) 同上書, p. 51.
- 9) 小田切毅一, 「アメリカ新体育論における用語成立とその系譜に関する研究」, 『平成 8 年度科学研究費補助金 (一般研究 (基盤 C)) 研究成果報告書』, 1997 年
- 10) 平井利雄, 前掲書, p. 220.
- 11) E. W. Gerber, *Innovators and Institutions in Physical Education*, Lea & Febiger, Philadelphia, 1971, pp. 374-379., Mabel Lee, *A History of Physical Education and Sports in*

- the U. S. A, John Wiley & Sons, New York, 1983, pp. 139-140, 169-170.
- 12) *Ibid.*, E. W. Gerber, *Innovators and Institutions in Physical Education*, pp. 374-379.
 - 13) Jaques Cattell and E. E. Ross, *Leaders in Education*, Third Edition, The Science Press, Lancaster, Pennsylvania, 1948, p. 1174.
 - 14) *Ibid.*, p. 1174.
 - 15) *Ibid.*, p. 1174.
 - 16) Dorothy La Salle, "Thomas D. Wood, MD.: A Great Leader an appreciation", *Journal of the American Association for Health, Physical Education, and Recreation*, 1951, Vol.22, No.9, p. 28.
 - 17) *Op.cit.*, Jaques Cattell and E. E. Ross, *Leaders in Education*, Third Edition, The Science Press, Lancaster, Pennsylvania, 1948, p. 1174.
 - 18) *Ibid.*, p. 1174.
 - 19) *Ibid.*, p. 1174.
 - 20) J. Mckeen Cattell and Jaques Cattell, *American Men of Science*, Fifth Edition, The Science Press, New York, 1933, p. 1232.
 - 21) *Op.cit.*, Dorothy La Salle, "Thomas D. Wood, MD.: A Great Leader an appreciation", p. 28.
 - 22) *Op.cit.*, Thomas D. Wood, "Some Controlling Ideals of Family Life of the Future", *The proceeding of The Fourth Lake Placid Conference on Home Economics*, 1902, p.25.
 - 23) Benjamin Kidd に関しては以下の論文を参考にした。住家正芳, 「内村鑑三はベンジャミン・キッドをどう読んだか—社会進化論の影響の一断面—」, 『立命館産業社会論集』, 第48巻, 第4号, pp.85-101.
 - 24) *Op.cit.*, Thomas D. Wood, "Some Controlling Ideals of Family Life of the Future", *The proceeding of The Fourth Lake Placid Conference on Home Economics*, 1902, p.25.
 - 25) *Ibid.*, p.27.
 - 26) *Ibid.*, p.28.
 - 27) *Ibid.*, p.27.
 - 28) *Ibid.*, p.28.
 - 29) *Ibid.*, p.28.
 - 30) *Ibid.*, p.29.
 - 31) *Ibid.*, p.29.
 - 32) *Ibid.*, p.29.
 - 33) *Ibid.*, pp.29-30.
 - 34) *Ibid.*, p.30.
 - 35) *Ibid.*, p.29.
 - 36) *Ibid.*, p.29.
 - 37) *Ibid.*, p.30.
 - 38) *Ibid.*, p.31.
 - 39) *Op.cit.*, Thomas D. Wood, "School Hygiene in its Bearing on Child Life", *Proceedings of the National Education Association*, p.778.
 - 40) *Ibid.*, p.778.
 - 41) *Ibid.*, p.779.
 - 42) 生物学的検査 (biological examination) に関しては以下の論文を参考にし, 「子どもの生活と学校衛生(1903年)」を著した Wood は, G. Gould のいう生物学的検査の内容を学びとったとみられる。G. Gould の当該論文は生物学的検査の主要な内容が判明する貴重な論文である。
George Gould, "A System of Personal Biologic Examination: the Condition of Adequate Medical and Scientific conduct of Life", *Journal of American Medical Association*, 1900, Vol.35, No.3, pp.134-138.
 - 43) *Ibid.*, p.135.
 - 44) *Op.cit.*, Thomas D. Wood, "School Hygiene in its Bearing on Child Life", *Proceedings of the National Education Association*, p.779.
 - 45) *Ibid.*, p.780.
 - 46) *Ibid.*, p.781.
 - 47) *Ibid.*, p.781.
 - 48) *Ibid.*, pp.781-782.
 - 49) *Ibid.*, p.782.
 - 50) *Ibid.*, p.782.
 - 51) *Ibid.*, p.782.
 - 52) *Ibid.*, p.782.
 - 53) *Ibid.*, p.783.
 - 54) *Ibid.*, p.783.
 - 55) *Ibid.*, p.783.
 - 56) *Ibid.*, p.784.
 - 57) *Ibid.*, p.784.
 - 58) *Ibid.*, p.784.
 - 59) *Ibid.*, p.785.
 - 60) *Op.cit.*, Thomas D. Wood, "School Hygiene. The Scope of School Hygiene in Modern Education", p.227.
 - 61) *Ibid.*, p.227.
 - 62) *Ibid.*, p.227.
 - 63) *Ibid.*, p.228.
 - 64) *Ibid.*, p.228.
 - 65) *Ibid.*, p.261.
 - 66) *Ibid.*, p.262.